ツアーの前に

あそび環境の充実が保育のゆとりを生む！

子どもがじっくりあそび込める環境は、どのように用意していったらよいのでしょうか。「あそび環境」を考えるときのベースとなるものについて、村上博文さんにお話を聞きました。

子どもの目線で部屋を見渡す

保育室に入った瞬間に、子どもの瞳の中にどのような光景が映るのか。子どもの目の高さで、保育者自身が確かめてみましょう。

視線の先が体育館のような何もない空間の場合、開放的な気持ちになり、思わず走り出してしまうことも。そうならないためには、保育室に入ったときに一瞬立ち止まる工夫が必要になります。

魅力ある環境が広がっていれば、子どもたちはうれしそうに保育室を見渡して「今日は何をしようかな？」と思いをめぐらせ、自然にあそび始めます。興味関心と環境がマッチすると、保育者が介在せずとも、子どもは集中してあそび込んでいきます。すると保育者にも、あそびが発展していくための仕掛けを考えるゆとりが生まれ……、子どもも保育者もハッピーな時間になっていきます。

「あそび」をどう配置するか

部屋の広さや形状などは園によってさまざま。子どもたちの発達や興味関心に沿ってあそびの種類を考え、それらをどう配置するかを検討します。保育室が狭くて悩んでいるクラスもあります。その悩みについては22～25ページも参照してみてください。

「この場所でOK？」「この色でいいかな？」と、自分の部屋をコーディネートするような感覚で楽しもう！

こんな視点で考えよう！

子どもと保育者の動線

子どもと保育者両方の動線をしっかり確認し、その動線に沿ってあそびのコーナーを配置。保育室内の動線が一定になると、無駄な動きがなくなり、部屋全体が落ち着いてくる。

あそびの性質と場所の相性

人の出入りがある入り口付近は、落ち着かず、気が散りやすいため、じっくり落ち着いて静かに取り組むあそびの場所には向かない。友達と協力して何かを創り上げていくには、ある程度広いスペースが必要。あそびによって、適した場所や空間の広さは違ってくる。さらに、あそびだけではなく、静かに心を落ち着かせたり休息したり、気持ちを立て直したりするための隠れ家的な空間をどう確保するのかも、検討しておきたい大切なポイント。

スペースの区切り

子どもがそれぞれのスペースの区切りを識別しやすいようにする。棚などで仕切る、床に何か敷くなど、視覚的に分かる工夫を。子どもが隣の様子を気にせず、かつ保育者が周囲を見渡すことができる仕切りの高さはどれくらいか、といったさじ加減も大事。

プラスもうひと工夫！

色合い

子どもを刺激しない色、落ち着きほっとする色合いは？

音

音が響かないような工夫、保育者の声も環境の一つ

光

程よい明るさ、間接照明の活用、光や影のおもしろさを感じられる空間づくり

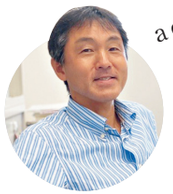
クラスの個性

子どもたちのブームを反映したスペースづくり、個性が見える環境

高さ

年齢ごとに異なる落ち着ける天井の高さ、乳児は天蓋の活用も

advice!



お話
村上博文さん
白梅学園大学子ども学部
准教授

「保育環境と子どもの育ち」が研究テーマの１つ。共著書に『こどもの環境づくり事典』（青弓社）、『乳児保育の理論と実践』（光生館）などがある。

次ページから、あそび環境誌上見学ツアーにご案内しま～す！

「あそび環境」お悩み相談

「こんなあそび環境をつくりたい！」という思いがあっても、物理的なハードルや人手不足など、難しい面もありますよね。保育者から寄せられたお悩み相談について、村上先生に聞きました。

保育室が狭くて、あそびのコーナーを常設できない

advice

常設するのが難しければ、例えば、移動式の棚を活用して、あそびの時間に簡易的なコーナーをつくってみるというのも一つのアイディア。それを試したところ、１年で子どものあそびが大きく変化した園がありました。

また、「どこか使えるスペースはないかな？」と、改めて部屋や園舎内の空間を見直してみてください。押し入れを整理整頓したら、下半分のスペースが隠れ家的スペースとして生かせるかもしれません。玄関を入ってすぐのスペースが広いからと、その一角をままごとスペースにした園もありました。廊下も工夫するとあそび空間として生かせるかもしれません。「ここはこういう場所」と決めつけずに考えると、案外見えてくるあそびスペースがあるのではないでしょうか。

あそびが発展しない……

advice

ある水あそびの場面。子どもが水道で水を流して、バケツにたまっていく水を不思議そうに眺めています。水があふれたらバケツをひっくり返して、またためて……の繰り返し。それも楽しいけれど、その先のおもしろさを考えた保育者が、子どもがある程度繰り返して満足感を味わった頃を見計らい、セロファンをさりげなく置いてみる。すると、それを見つけた子どもによって、あそびが発展していく可能性も。

子どもが興味を示さずがっかりすることもありますが、「これを置いたらどうなるかな？」と、あそび気分で楽しみながら、環境に味付けをしていきましょう。予想を超える子どものおもしろい姿に出会えるかもしれません。

おもちゃが散らかって、片付けが大変……！

advice

あそびは制限したくない。だけど、保育者が片付けて回るのも大変ですよね。まずは、「子どもが自分で片付けやすい環境をつくる」ことが鉄則。物の場所がはっきり分かる環境になっているかどうかを見直してみましょう。それと同時に、保育者が片付ける姿を繰り返し見せていくことも大切です。「そもそもなぜ散らかすのか」という視点でも考えてみましょう。もしかしたら、あそびに集中できていないのかもしれない。そこに置かれているおもちゃがあそびたいものではないのかもしれない。ちょっとあそんでみてもおもしろくない、ほかのおもちゃに手を出す、そして散らかる……という状況なのかもしれません。子どもの興味関心と置かれているおもちゃがずれていないか、もう一度考えてみることも大切です。

個々にやりたいあそびができるようにしたいけれど、保育者の数が足りない……

advice

これもよく耳にするお悩みです。園のさまざまな場所で思い思いにあそぶ子どもたちを、安全面に配慮しながらどう見守ったらいいの？ということですね。さまざまな場所にいるのは、子どもたちが主体的にあそんでいる証拠であり、大切にしたいものです。

ポイントはチームワークです。例えば園庭では、担当の保育者全員で、それぞれの立ち位置を常に確認し、見守りの目が重ならないよう、漏れのないよう、必要に応じて移動していきます。ある保育者が右に動いたら、もう1人がフォローするように動く。そのためには、普段の密なコミュニケーションが欠かせないのは言うまでもありません。

おもちゃの貸し借りで、しょっちゅういざこざが発生！

advice

10人の子どもにおもちゃを10個用意すれば、取り合いはなくなります。でも、数が限られているから譲り合いが生まれ、我慢する経験ができる。おもちゃを取られて悲しいという感情を知ることもできる。おもちゃの貸し借りも一つの経験としてとらえるなど、保育者の意図によって、おもちゃの提供の仕方は変わってくるのではないでしょうか。

また、子どもたちが特定のおもちゃに集中してしまう場合、おもちゃの数や種類が少ないのかもしれません。また、友達があそんでいるおもちゃよりもその子の興味に合うおもちゃがないか考えてみてください。それが見つかったら、さりげなく置いてみると、子どもは自ら手にしてあそび始めるでしょう。

食事の環境をつくるためにあそびが継続できない

advice

子どもたちが協力して始めた、ブロックの街づくり。しかし、途中でお昼の時間に……。本当はそのまま残してあげたいけれど、保育室の空間的に難しい！という悩みは多いと思います。

これも発想の転換が必要。継続性のあるあそびについては、最初から遊戯室などの場所を用意したり、保育室の一つをあそび専用にしたりといった、思い切った工夫もあり得ます。

限られた空間を有効に活用するためには、テーブルの大きさや数を見直す方法もあるでしょう。一斉に同じ時間に食事をする場合には、子どもの数だけテーブルが必要になりますが、個々の生活リズムを考えて、少人数で食事の時間を設定すれば、一度に必要なスペースは小さくなります。そうすることで、あそびを残しておくスペースが生まれるかもしれません。

園庭がない！

advice

ある園では、「園の周りが私たちにとっての園庭だから」と、雨の日も雨具を身に着けて近くの公園にあそびに出掛けています。園庭が狭いなら高さを生かそうと、3階建ての固庭遊具を置いた園もあります。

いまはSNSなどのメディアで、園を超えて情報やアイディアを共有したり、ネットワークをつくったりしやすい時代です。「うちは園庭がなくて困ってます！」と発信してみることで、さまざまなアイディアに出合えるかもしれませんよ。